

# 難民 REFUGEES

2000年第1号(通巻116号)

## コンボ

冬とのたたかい

そして、新たな流出



UNHCR

国際連合  
難民高等弁務官  
事務所

# なぜコソボで、 アフガニスタンではないのか？

質問：1999年に起きた最大の戦争は？

答え：エチオピアとエリトリアの戦争。世界にはほとんど知られていないが、それぞれ25万人以上の兵

なぜ、人道危機ごとに異なる対応をするのか。

世界の大国(主要拠出国でもある)は、いつも国益に影響を与えそうな危機に、より多くの資金と人員

を投じてきた。だからその対象は、コソボであってアフガニスタンではないのである。

また、財政の引き締めがうたわれるこの時代、アフガニスタンのように長引く問題に、拠出国はじっくり対応できなくなってきた。

その証拠に、各国政府はUNHCRなどに拠出する資金の「使途」を指定するようになった。そして、より



破壊されたアフガニスタンの首都カブールで、食糧の配給を待つ国内避難民と地元民の列

力を注ぎ込み、取るに足らない土地をめくり争っている。死者、負傷者、捕虜が合わせて数万人、避難民は60万人以上にのぼる。

質問：最近でいちばん残虐な戦争は？

答え：シエラレオネ内戦。この8年間で、事実上、全国民が故郷を追われたか、手足切断、レイプ、誘拐などの被害を受けた。死者は5万人以上。

質問：世界最大の難民問題は？

答え：アフガン難民。現在も260万人以上いるが拠出国の関心が薄く、UNHCRの援助計画は長期間、破産状態にある。

さて、上記の質問すべてに「コソボ」と答えたとしても、一般の人なら仕方がないだろう。しかし前代未聞の報道合戦や、コソボ問題の解決に向けた各国の軍事的・政治的・財政的な肩入れは、援助機関に改めて深刻な問題を突き付けた。「国際社会」は

深刻な事態を無視して、コソボなど目立つ「大衆受けのいい」危機には資金を出す。

この歪みを正すのは難しそうだ。国際社会は、国連機関や非政府組織(NGO)を通じて、アフリカなど長期的な問題を抱える地域に重点を移すべきだ。そして危機防止と、経済や社会の長期的開発に、もっと力を入れるべきだ。

当事者である国や地域機構も、自分たちの問題に効率的に対処するため、これまでの倍以上の努力をする必要がある。

両方がうまく実行されれば、同じ様な努力が他の地域にも広がっていくだろう。最近、アフリカの角やコンゴ、シエラレオネでは、戦闘を解決すべく地域に根ざした試みが始まっている。それらは実験的で不安定かもしれないが、国際社会の努力と結びつけば、最終的には故郷を追われた無数の人々に良い知らせをもたらすだろう。



編集者：Ray Wilkinson  
 寄稿者：Judith Kumin, Ron Redmond,  
 Kris Janowski, Paul Stromberg,  
 Vesna Petkovic, Diane Goldberg,  
 Wendy Rappeport  
 編集アシスタント：Virginia Zekrya  
 写真部：Anneliese Hollmann,  
 Anne Kellner  
 デザイン：WB Associés - Paris  
 制作：Françoise Peyroux  
 総務：Anne-Marie Le Galliard  
 配本・発送：John O'Connor, Frédéric Tissot  
 地図・衛星画像：UNHCR - Mapping Unit

日本版  
 翻訳協力：藤原 朝子、佐藤 綾子  
 編集・総務：日本・韓国地域事務所 広報室

『難民Refugees』誌は、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）ジュネーブ本部・広報部と東京にある地域事務所が発行する季刊誌です。寄稿記事に表わされた意見は、かならずしもUNHCRの見解を示すものではありません。また図示された国境の表示は、各領土およびその政府当局の法的立場に対するUNHCRの見解を表明してはおりません。

掲載記事の編集権はUNHCRにあります。掲載記事・写真のうち、著作権©表示のあるものの転載・複写は一切できません。また©表示のない写真の使用については、下記のUNHCR事務所までお問い合わせください。

本誌の日本語版制作協力：(株)イソラコミュニケーションズ(東京)、英語版および仏語版制作協力：ATAR sa(スイス)。本誌の発行部数は、英語、仏語、ドイツ語、イタリア語、日本語、スペイン語、アラビア語、ロシア語、中国語の各国語版を合わせ20万6000部。

発行：UNHCR日本・韓国地域事務所  
 〒107-0052 東京都港区赤坂  
 8-4-14  
 TEL 03-3475-1615  
 FAX 03-3475-1647  
 ホームページ  
<http://www.unhcr.or.jp>  
 郵便振替 口座番号  
 : 00130-4-59734  
 加入者名：UNHCR  
 業務時間：月曜～金曜日  
 9:30～17:30  
 (昼休み12:30～13:30)  
 日本語版発行：2000年1月

表紙：3月末にコソボから避難した後、破壊された故郷の村に帰ってきた人々。

UNHCR / R. CHALASANI

UNHCR ジュネーブ本部  
 P.O. Box 2500  
 1211 Geneva 2, Switzerland  
[www.unhcr.ch](http://www.unhcr.ch)

# 難民 REFUGEES

2000年 第1号 (通巻 116号)

## 2 編集部から

人道援助は公平になされているのか？

## 4 特集

迫りくる冬とコソボの戦い  
 フェルナンド・デル・ムンド、  
 レイ・ウィルキンソン

年表：バルカン半島の歴史

オピニオン：  
 セルビア人は許し合う民族ではない  
 ティム・ジュダ

統計：数字でみるコソボ紛争

最初の避難：コソボ住民の避難は1990年に始まっていた

## 16 地図でみるバルカン半島

## 18 原点

コソボ紛争の原点を探る  
 ニコラス・モリス

## 20 セルビア

新たな人口流出  
 モンテネグロ：誰でも歓迎

## 22 インタビュー

デニス・マクナマラUNHCR元バルカン  
 担当特使に聞く

## 24 オピニオン

軍と援助機関の協力  
 セドリック・ソーンベリー

## 25 帰還

コソボ再訪  
 フェルナンド・デル・ムンド

命を救う：みずからを犠牲にする慈善団体

## 27 アフリカ

コソボ報道の影で  
 ピーター・ケスラー

## 28 Short Takes

## 30 People and Places

## 31 Quote Unquote



UNHCR/R. CHALASANI

4 ケケス(アルバニア)に到着したコソボ難民。アルバニアに逃れた45万人の大半が、この小さな国境の町を通った。



UNHCR/R. CHALASANI

20 アルバニア系住民の報復を恐れ、ペチを脱出して国際平和維持部隊(KFOR)に保護を求めるセルビア系住民たち。



UNHCR/L. TAYLOR

27 親のいないコンゴ難民児童(タンザニアのキャンプ)コソボ紛争の一方で、アフリカ難民の窮状は忘れられがちだ。

# 時間とのたたかい

おびたしい数のコソボ住民が帰還したが、  
冬という新たな敵が近づいてくる。

フェルナンド・デル・ムンド、レイ・ウィルキンソン

オスマン・イセンリカイが83歳の父親をみつけたのは、ダムネジ山のふもとに建つ自宅の井戸の中だった。アルバニアからユーゴスラビア連邦コソボ自治州のストラリツ・イ・エフェルメ村に帰って来たのが6月。以来、年老いた父親を懸命に探したが、身近な場所はすっかり見落としていた。心地よい夏の夕べ、まだ太陽の光が残るなかで、オスマンは改めて父親の死骸をみつめ、かつて優美だった石造りの家に目を移した。建物は黒焦 ▶  
(6ページにつづく)

「難民列車」を降ろされたアルバニア系住民たちは、安全なマケドニア側の国境地点ブラツェまで線路を歩いた。





1999年4月初め、ブラツェ（マケドニア）の国境地点。

▶ げた。40頭の羊と10頭の牛は、とうに姿を消し、近くの牧草地も枯れている。

オスマンは妻と子どもが住めるように納屋を片付け、数日後には猛暑を少しでもしのぐため、UNHCRから支給されたテントを木の下に張った。「とにかく生きていかなければなりません」と、オスマンはつらい経験の影をみじんも見せない。「仕事をしたい。なんでもやります。でも今年の冬を乗り切るには、神様のご加護と奇跡が必要だ。」

もう神様には感謝したけどね オスマンは言う。彼は数か月前、コソボを飲み込んだ悪夢を逃れるため、多くのアルバニア系住民と同じように故郷を後にし

たにもかかわらず、こんなに早く家族全員が帰ってこられたのだ。

3月28日の日曜日だった。地元のロマ（ジプシー）がオスマンの家にやって来て、不吉なメッセージを告げた。「セルビア兵が襲ってくるぞ。逃げるならあと1時間だ」。オスマンと二人の息子は、まだ雪が残る丘を越え、隣接するユーゴスラビア連邦モンテネグロ共和国へ、さらにアルバニアへと逃げ込んだ。

妻のサニスエと残りの四人の子どもたちは、「アルバニアに行っちゃえ。クリントンが待ってるぞ」という警官たちの黒声を浴びながら、トラクターでノロノロと国境をめざし、ママルスにたどり着

いた。70年前、オスマンの父親がセルビアの虐殺を逃れて避難した国境の町だ。だが今回、父親は家に残ることに決めた。

#### 最初の犠牲者たち

3月のその悲劇の日、オスマンの父親は殺された。以後数週間で推定1万1000人が虐殺され、事態は史上最悪かつ最も複雑な人道危機に発展した。

たしかに近年、もっと大規模な難民流出はあった。湾岸戦争後、200万人近くのクルド人が故郷を追われた。もっと急激な流出もあった。1994年、ルワンダのフツ系住民100万人以上が数日のうちに国境を越えてザイルに逃れた。



## 年表

バルカン半島の動揺と紛争の火種は、19世紀末、当時のヨーロッパ列強が民族構成を無視して国境線を引いた合意までさかのぼることができる。以下はコソボ危機を取り巻く、歴史上および現代の重要事件である。

1878年  
バルカン半島周辺で長年続いた戦争と、ロシアとの緊張の高まりを受け、世界の列強がベルリン会議でバルカン半島を分割。国際的な緊張を緩和するため、三つの新興国（セルビア、モンテネグロ、ルーマニア）が承認されたが、地元住民の意向は無視。

1912～13年  
第一次、第二次バルカン戦争が周辺国すべてを巻き込む。セルビア、ルーマニア、ブルガリア、ギリシア、アルバニアのバルカン同盟が、数世紀にわたる支配国オスマン・トルコをバルカン半島から駆逐。

1914年6月28日  
オーストリアのフランツ＝フェルディナント皇太子が、ボスニアの首都サラエボでセルビア人青年に暗殺され、第一次世界大戦の発端に。

1918年12月1日  
「セルブ＝クロアート＝スロベニア王国」がオーストリアから独立。後にユーゴスラビア王国と改称。

1944年10月24日  
チトーことヨシフ＝ブロスがバルチザン闘争を展開してベオグラードを解放。ユーゴスラビアに共産主義体制を確立。

1987年4月24日  
セルビア系住民がコソボ自治州の町ボイエで、アルバニア系住民の迫害に対して初の大規模な抗議運動を行なう。

1989年  
旧ユーゴスラビア政府が、コソボの自治権を事実上はく奪。以後10年間で、推定35万人のアルバニア系住民がヨーロッパに庇護を求める。

1991年6月25日  
スロベニアとクロアチアが旧ユーゴスラビアから独立を宣言。

1992年3月3日  
ボスニア・ヘルツェゴビナが、独立を宣言。しかしボスニアのセルビア系住民がサラエボを包囲し、国土の70%を支配。

1995年11月21日  
敵対に終止符を打ち、紛争を逃れた数百万人に帰還の道を開くため、 Dayton 和平合意が調印される。

1998年3月  
何年にもわたる緊張の高まりの結果、コソボで多数派アルバニア系住民とセルビア系住民の戦闘が起きる。数か月で約35万人がコソボ内外に避難。

1998年10月27日  
ユーゴスラビア連邦のスロボダン・ミロシェビッチ大統領が停戦とユーゴスラビア軍の一部撤退に合意。欧州安全保障協力機構（OSCE）は、合意の実施状況を監視するため、2000人の検証団の第一陣を送る。

1999年2月  
ランブイエ（フランス）でコソボ和平交渉。しかし話し合いは物別れに終わり、コソボでは再び緊張と抑圧が高まる。

1999年3月24日  
北大西洋条約機構（NATO）が、度重なる警告の後、78日間におよぶ空爆を開始。3日間で大量のアルバニア系住民が徒歩、トラクターや車で隣国アルバニアやマケドニアに到着。ユーゴスラビア当局は、特別にあつらえた「難民列車」で何千人もの住民をマケドニアに強制移送。プリシュティナなど主要都市から事実上アルバニア系住民が姿を消す。

1999年4～5月  
難民の国外生活が長期にわたるとの予想のもと、国際機関、各国政府、およびNATOによるコソボ平和維持部隊（KFOR）のアルバ

ニア部隊（AFOR）が、多数のキャンプ設置に乗り出す。難民は約44万4600人がアルバニアへ、24万4500人がマケドニアへ、6万9900人がモンテネグロへ逃れた。しかし難民の大量流入を嫌うマケドニア政府の圧力で、9万人以上のアルバニア系住民が暫定的に29か国に移送された。

1999年6月3日  
ユーゴスラビア政府が、ユーゴ軍のコソボ全面撤退と、国連主導の平和維持部隊の駐留を認める和平案を受諾。

1999年6月12日  
ロシア軍とNATO軍がコソボ入り。数日後、UNHCRをはじめとする人道機関の第一陣が続く。

1999年6月14日  
NATOとUNHCRが避難場所にとどまるよう求めたにもかかわらず、大勢の難民がコソボに帰り始める。史上最速の難民帰還のひとつで、3週間で60万人が破壊された故郷に帰った。しかしこうしたアルバニア系住民とは逆に、セルビア系住民とロマ約20万人がコソボから脱出。セルビアやモンテネグロに安全を求め、新たな難民流出が発生。

1999年6月  
UNHCRは、コソボ地方内に7事務所を開設。厳しいバルカン半島の冬を控え、国連コソボ暫定統治機構（UNMIK）は数万人のNATO軍を背景に、住民数十万人の自宅再建や食糧調達、水や電力供給を支援。

しかしそれでもコソボは特異だった。3月24日、以後78日間に及んだ北大西洋条約機構（NATO）軍の空爆が始まると、数時間のうちに100万人近くが避難を開始。ところが3か月後には、大部分の人々が破壊し尽くされた故郷に戻ってきた。このような短期間にこれほど多くの人が流出して帰還した危機は、おそらく過去に例がないだろう。

難民危機が大国の政治とこれほど絡み合い、事実上すべての主要国と、世界最強の軍事同盟NATOを巻き込んだこともなかった。また、有力な活動主体がこぞって「これは基本的には人道問題だ」と主張した危機が、これほど▶



あるコソボの村の航空写真。80%の建造物が破壊されている。

▶ 大きな余波を生んだこともなかった。

アルバニア系住民の帰還は、バルカン半島の終わりなき人口移動の新たな引き金を引いた。今度は報復を恐れたセルビア系住民とロマ約20万人が避難し始めたのだ。

NATOは、コソボ平和維持部隊(KFOR)として派遣予定の5万人の第一陣を展開。国連も国連コソボ暫定統治機構(UNMIK)を組織して、ゴミの収集から街灯の整備、警察組織、司法制度、刑務所の再建、数十万人の再定住からコソボ全体の大規模な復興までを指揮している。

「コソボは、これまでの国連と国際社会の平和実施活動のなかで、最も困難で

最も複雑な事例になるだろう」と、隣国ボスニアで同様の(ただしもっと限定的な)国際活動を指揮してきたスウェーデンのカール・ビルト元首相は言う。コフィ・アナン国連事務総長は、コソボの再統合には最低10年はかかるだろうと述べた。費用は300億ドルに達する可能性がある。

援助機関にとっては初めから時間との戦いだった と言うのは、UNHCR旧ユーゴ・マケドニア担当特使で、アナン事務総長にUNMIK人道問題担当特別代表に任命されたデニス・マクナマラだ。まず安全な避難場所を探し、そして帰還させ、今度はバルカン半島の冬を乗り越えるのを助けなくてはならない。

広範囲にわたる破壊

米国の偵察機が撮った写真によると、調査した建物27万1314戸のうち6万7000戸が何らかの損害を受けていた。別の調査では、各地の村落で大部分の学校や保健所が破壊され、農業生産は止まり、食糧の流通が劇的に低下し、飲み水は「人間や動物の死体などさまざまな物質」で汚染されていることがわかった。

被害状況は地域ごとに大きく異なる。事実上無傷の所もあれば、ほぼ全壊した所もある。UNHCR広報官の篠原万希子は、コソフスカ・ミトロビツァ近郊のツァブラ村で、民家175戸すべてが燃やされ、ブルドーザで破壊され、「瓦礫の山



になって」いるのを見た。「日中に戻ってきて、瓦礫の谷間にUNHCRの青いテントを張り、かつて豊かだった家々や学校、診療所の周りを呆然とさまよい歩く男性もいました」と篠原は言う。

しかしコソボへの大規模な帰還が始まって数週間もすると、人々は元の暮らしを取り戻し始めた。家から瓦礫を掃き出し、畑に残っているものを拾い集め、商店も再開した。アルバニアやマケドニアの商品を並べた青空市場が

できると、コソボに活気が戻ってきた。

迫りくる冬に備えて、UNHCRと欧米の政府機関は大急ぎで住宅キット（ビニールシート、木材、工具など）5万6000戸分を送った。天候が崩れる11～12月までに、壊れた家の少なくとも一部で住民が風雨をしのげるようにするためだ。さらにUNHCRは、テント3万張、コンロ6万個、毛布100万枚以上、マットレス55万枚、衛生・調理器具18万3000セットの配布を計画している。

日本政府は、95年の阪神・淡路大震災で活用されたプレハブの仮設住宅500戸を提供した。

マクナマラUNMIK人道問題担当特別代表は、「難民の帰還は比較的スムーズにいった」と言う。「長期的な復興も、ほとんど問題はないはず。問題はその中間的な段階、応急処置です。これから数か月の課題はコソボ住民を越冬させること。春になれば、状況はすっかり変わるでしょう。」 ▶

## 「セルビア人は許し合う民族ではない」

アルバニア系住民は帰還したが、コソボ問題は終わっていない。

### ティム・ジュダ

難民問題だけを見ると、コソボは異様に歪んでいる。勝利と悲劇が同時に存在するのだ。大部分はすでに帰還した。避難中も、世界の難民に比べれば、「五つ星」キャンプと呼べそうな場所で援助を受け、9万2000人が第三国に一時避難した。

コソボ州内の避難民も、みな帰ってきた。ほとんどの家は焼かれ、略奪されたが、アルバニア系住民の家族の絆は強く、一時収容センターに身を寄せなければならぬ人の数は、一般的な難民危機よりはるかに少ない。

また、ここ数十年のコソボでは、家族の誰かが外国で働いている状況が一般的になっていた。住民たちは広大な敷地をもち、国外にいる親戚の仕送りで、大きな家を少しずつ建てる。だから、家を焼かれても、大部分の人にとっては建てなおすだけのこと。欧州連合（EU）などからの「臨時収入」のおかげで、UNHCRの出番は予想よりはるかに小さくなりそうだ。

コソボ難民の勝利を語るのはいくらにしてもおこらぬ。悲劇の源は、復讐というコソボの歴史的文化的にある。アルバニア系住民の帰還は、セルビア系住民の流出をもたらした。その多くは、アルバニア系住民の追放を容認したと見られている。しかしア

ルバニア系住民の追放は、北大西洋条約機構（NATO）にユーゴスラビアを空爆させた報復であり、だからNATOがアルバニア系住民の面倒をみるべきだ、とセルビア系は主張した。

ところがNATOが本当にアルバニア系住民に味方したため、今度はセルビア系住民が代償を払う番になった。ここでは多文化共存などという美辞麗句には誰も興味がない。今世紀のコソボのアルバニア系とセルビア系の歴史は、支配と復讐の繰り返しに他ならない。

尻ぬぐいを押し付けられて

NATOも国連もその鎖を断ち切れず、その尻拭いが必然的にUNHCRに回ってきた。6月13日にNATO軍の戦車が初めてコソボに入ってくると、約18万人のセルビア系住民、ロマなどが逃げ出した。国連コソボ暫定統治機構（UNMIK）のクシュネル国連事務総長特別代表は、セルビア系住民2万5000人に残留を訴えたが、それは責任ある政策といえるのだろうか。

UNHCRにとって、答えは出ている。同じ質問が、1992年夏のボスニアで投げかけられているのだ。「ムスリム人とクロアチア人を追い出すバスをもってこい」というセルビア軍の要求に、UNHCRは悩んだ。

ここでバスを用意すれば、民族浄化に加担することになってしまう。しかし答えは「人命が最優先」。その姿勢は以後も貫かれた。

だから、UNHCRは絶望した人々の避難を助け続けなければならない。今回はセルビア系住民だ。しかしアルバニア系住民の場合と違って、今回は帰還の道を開いてくれる空爆はない。

おそらくこう思っている人はいるはずだ。セルビア系住民がコソボから排除されれば、すべては解決する。

しかしそんな人も、数十年後には間違いに気付くだろう。セルビアの歴史家で政治評論家のアレクサ・ディラスは、「復讐の可能性がある限り、欲求は増す。アルバニア系住民が復讐を成し遂げたなら、セルビア系住民が復讐をする時もあるだろう」と言っている。

セルビア系住民の追放は、彼らが明日にもコソボを取り戻す可能性を示している。

ディラスは、復讐の精神は成長すると言う。「セルビア人は、許し合う民族ではない。彼らが1389年の敗北を610年間も覚えていたのなら、今回が例外だとなぜ言えるだろう？」

ティム・ジュダはジャーナリスト。

著書に『セルビア人：ユーゴスラビアの歴史と神話と破壊』（1997年、エール大学出版）がある。■

▶ セルビアの聖地

Kosovoは、大部分のセルビア系住民にとっての聖地だ。かつて栄えた中世セルビア王国がオスマン・トルコに侵略され、1389年の「 Kosovoの戦い」を境に衰退したからだ。その後の数世紀で敗北は伝説となり、ムスリムの侵略に対するキリスト教世界の戦争として神話的に語り継がれた。

しかし1980年代末までに、イスラム教徒のアルバニア系住民が人口約200万人の9割を占めるようになり、セルビア系住民を圧倒。89年に、当時ユーゴスラビア社会主義連邦共和国（旧ユーゴ）大統領だったスロボダン・ミロシェビッチ（現ユーゴスラビア連邦大統領）が Kosovoの自治権を大幅に縮小すると、セルビア人の民族主義に火が付き、二つの民族グループの亀裂は決定的になった。

90年代前半、旧ユーゴが流血の戦いでスロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナに分裂したとき、 Kosovoにも導火線が引かれた。

Kosovoへの抑圧は89～98年に激しくなり、アルバニア系住民約35万人がヨーロッパに避難場所を求めた。また98年3月に戦闘が拡大すると、数か月で35万人が Kosovo内外に避難した。

UNHCRは、84人の職員を送りこみ、2800万ドル規模の活動を展開。これによって40万人を助けたが、今年3月末の NATO軍の空爆開始を前に、他の国際機関とともに Kosovoからの撤退を余儀なくされた。

「 NATOとユーゴ軍が衝突しても数日間のことで、またすぐに戻ってこられると思っていました」と、当時 Kosovoで活動していた UNHCRのフェルナンド・デル・ムンドは語る。

しかし空爆は7日間続いた。住民100万人近くが Kosovoから隣国アルバニアや、マケドニア共和国、モンテネグロに流出。さらに数十万人が Kosovo



ソビ村に帰還する途中、平和維持部隊の戦車とすれ違う Kosovo難民たち。

内で避難し、山間に隠れたり、村から村へと逃れ、建物の地下や人目につかない場所で数週間から数か月間身を隠した。

UNHCRは、 Kosovoに約10万人分の緊急備蓄をしていた。しかし、まさかユーゴ当局が Kosovo全体の民族浄化を緻密に

計画していたとは予測していなかった。 UNHCRだけではない。米国、フランス、イギリスなどの各国政府や、 NATOやバルカン半島専門家の多くも、そんな事態は予想していなかった。実際、ランブイエ（フランス）での平和交渉で、お互いの顔を立てる妥協が成立するだろうと最後まで期待されていた。

ジレンマ

当時、 UNHCRの Kosovo担当特使だったニコラス・モリスは、 UNHCRが直面したジレンマを指摘した。主だった欧米諸国政府は、難民が流出し始めるわずか数日前まで、



地雷をみせる平和維持部隊に参加しているドイツ兵。



ランブイエ合意の実施をUNHCRに促していた。ところが難民が実際に近隣諸国に流出しはじめると、UNHCRの準備の悪さを厳しく批判した。しかしUNHCRが難民の流出を予測して支援を要請していたとしても、これらの国々は「私たちの和平努力が失敗するというのか」と要請に応じてくれなかったらう。

難民危機は、ある特定の瞬間や事件が決定的なイメージになりがちだ。コソボの場合、「難民列車」のマケドニア到着や、数千人の避難民がマケドニア国境の町ブラツェの野原で立ち往生している姿が、世界中の人々の心に焼き付いた。コソボの州都プリシュティナなどの駅では、数万人のコソボ住民が

セルビア当局によって列車に詰め込まれ、国境に運ばれた。その列車と、着の身着のままで呆然と長い列を作る人々の姿が、第二次大戦中にユダヤ人をガス室に送りこんだ列車を連想させたのも無理はない。「ジェノサイド(民族大量虐殺)」という言葉も、やたらと使われ始めた。

やはり複雑な民族構成のマケドニアでは、アルバニア系住民の大量流入によって国内が不安定になることを恐れ、政府が新たに到着する避難民を野外に足止めた。医療と食糧もほとんど与えず、援助機関の立ち入りも制限した。

これに対して国際的な批判が高まると、マケドニア当局は突然、夜の間にまぎれて難民をトルコやアルバニア

このような短期間に、これほど多くの人が出し帰還した危機は、過去に例がないだらう。

## コソボの統計

- コソボで最後に人口調査が行なわれたのは1991年。総人口は195万6196人だった。ただし多数派のアルバニア系住民がボイコットしたため、信頼性はかなり低い。
- アルバニア系住民は約170万人と推定され、少数派のセルビア系住民は約20万人。他にロマなどの少数グループがいる。
- 1989年にコソボの自治が事実上はく奪されると、アルバニア系住民約35万人がコソボを脱出し、西ヨーロッパで庇護申請した。
- 1998年に新たな危機が起きたとき、さらに10万人がコソボを逃れた。
- 1999年3月24日、北大西洋条約機構(NATO)は78日間におよぶ空爆を開始。
- アルバニア系住民84万人8100人が避難または追放される。このうち44万4600人がアルバニアへ、24万4500人がマケドニアへ、6万9900人がモンテネグロへ向かった。
- 4月2日、マケドニアには推定4万5000人の難民が到着。今回の危機で、1日の到着人数としては最高を記録。
- 人道避難計画のもと、マケドニアにいた難民9万1057人が29か国に移送された。
- 和平合意の調印から3週間で、難民60万人以上がコソボに戻った。ここ数十年で、もっとも迅速な帰還のひとつだ。
- 同じ時期、セルビア系住民とロマあわせて推定18万人が、セルビア共和国に流出。
- イギリスのある公式発表によると、紛争中にセルビア治安当局に殺されたコソボ住民は、少なくとも1万1000人。
- UNHCRの推測では、紛争中に破壊されたり著しい損傷を受けた家は少なくとも6万7000戸、実際にはその数は二倍に達する可能性がある。

に移送。一段と大きな議論を呼んだ。夜が明けた野原には、裂けた衣服、おもちゃ、ぼろ布で作ったテントの残骸、そして悪臭だけが残った。

### 紛争の本当の姿

ブラツェの野原での出来事は、コソボ紛争の多くの側面を浮き彫りにした。世界は初めて、コソボの民族浄化の背後にある残忍さと緻密な計画を知った。プロ

▶ バル(クロアチア)攻撃、サラエボ包囲、拘禁キャンプ、ボスニアでの大量レイプといった惨事は数年前に起きたばかりなのに、事態の深刻さはなかなか理解されなかったのだ。

難民の流出を予測できなかったのに加え、援助機関の準備の悪さも目立った。緊急物資の配給や難民キャンプの設置は遅れ、UNHCRもブラツェの野原にいた難民たちを保護できなかった。

UNHCRのソーレン・イエセンピーターセン高等弁務官補は、UNHCRの人員や援助の遅れを認めつつも、こうした批判の背景には、責任転嫁や明らかな無知によるものも多い、と指摘する。

例えばブラツェで、UNHCRは弱腰だ

ったと批判する声がある。しかし実は、ある国の政府が、UNHCRに公式発表の自粛を強く求め、報道官の解任まで求めていた。グラついた政府を安定化する政治努力のほうが、人道的な配慮よりも重要と考えられたのだ。

UNHCRの緊急対応に批判的な記事を書いた熟練ジャーナリストも、厄介な資金手続きを知らなかった、と後になって認めている。新たな危機にすぐ使える準備金はない。コソボ危機でも、まず抛出国に追加資金をアピールしなければならず、対応が遅れるのは避けられなかった。UNHCRは資金準備ができなければ、とにかく身動きできないのだ。

皮肉にも、コソボはこれまでで最も報

道された人道危機だったが、UNHCRが創設以来の50年間でこれほど資金不足に陥ったことはなかった。

その日をしのぐのがやっと

「軍事行動には何十億ドルも投じたのに、私たちのアピールにはこたえず、国際社会が難民の帰還を支援してくれないのは残念だ」とイエセンピーターセンは言う。「週に約1000万ドル必要なのに、毎日その日をしのぐのが精一杯です。」

ブライアン・アトウッド米国際開発局(USAID)局長は次のように指摘する。「UNHCRは当初、任務を果たしていなかった。資金や人員がなかったからだ。UNHCRの失敗は、資金を出さなかった

モリー二国境地点でアルバニア系避難民を治療する「世界の医師団」の医師。



われわれの責任だ。国連に財政削減を強いたことが、「非常に大きな打撃となった」とアトウッドは指摘する。

伝統的な拠出国は、UNHCRへの資金拠出を厳しく切り詰めている。たとえばイタリア政府は、難民流出のピーク時に80万ドルを拠出した（ただし民間ベースでは、その10倍以上の寄付があった）ところが政府間援助、つまり二国間プロジェクトには、これまでになく多額の資金が投じられた。

イタリアは、アルバニア北部の町クセスに真っ先にキャンプを設置。他の政府主導プロジェクトとともに、何万人もの難民に恩恵を与えた。

しかしこの種の援助にも問題がある。難民の援助・保護活動の調整役である

UNHCRを無視したため、新たな援助計画やキャンプの設置に無駄、重複、混乱がおきた。あるヨーロッパの国は、キャンプを設置したものの、ある晩、何の連絡もなく職員たちが姿を消してしまった。別の民間組織は、クセスに難民キャンプを作り、「自分たちの難民」をUNHCRなどが訪問するのを禁止し、援助機関どうしの調整ミーティングにも出席しなかった。

「目の前の利害関係を過小評価したことが私たちの最大の過ちでした」と、ある幹部援助職員は振り返る。「たしかにコソボは非常に大規模な人道危機でしたが、政治的・軍事的な利害関係はもっと大きかったです。あらゆる成功と失敗が誇張されました。誰もが手柄を上げたらすぐに周囲に認めさせましたが、責任逃れにかけてはもっと素早かった。私たちはこうした駆け引きでは素人同然だったのです。」

#### 希望と悲劇のシンボル

ブラツェの光景がコソボ危機の決定的イメージなら、クセスの町は人間が犯した悲劇の象徴として、また一方で希望の象徴として、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争のサラエボやスレブレニツァと同じく難民史に語り継がれるだろう。

自然のままの野山やフィヨルド式の湖が広がるアルバニア北部は、目を見張るほど美しい。しかしその景色も、共産主義の時代に炭坑（現在は閉山）労働者向けに次々建てられた5階建てのアパートのために、台無しにされてしまった。現在この地方は、抗争、マフィア、民兵、密輸、失業にあえいでいる。クセスから曲がりくねったでこぼこ道を行くと、コソボとの国境地点モリーニに着く。この町もさびれて活気がない。

しかしアルバニアに逃れてきたコソ

「コソボは、これまでの  
国連の平和実施活動で、  
最も困難で複雑な  
事例になるだろう。」

ボ難民44万人以上のうち、ほぼ全員がモリーニとクセスを通過した。クセスの人口は2万8000人。ヨーロッパ

やアメリカの小さな町に、貧しく脅えきった難民がこれほど大量に押し寄せる事態は想像もつかないだろうが、クセスは比較的冷静に対応した。

ヨーロッパの僻地だったクセスは、突然、世界の注目の的になった。多くの国際報道機関が、衛星中継施設を作り、人気キャスターや援助職員、NATO職員、著名人が何百人もやってきて、古巴アパートを月3000ドルで借り上げた。

なかでも「パー・アメリカ」という愛称で呼ばれた薄汚いたまり場は、あらゆる事件の非公式な情報発信地になった。ジャーナリストたちは、アルバニア系武装組織のコソボ解放軍(KLA)が「占領地帯」へ連れて行ってやる、と言ったのを信じて何日もここで待った。地元マフィアは、難民の「人身取り引き」を話し合っていたという。住民は運転手や通訳、雑用係に雇われ、失業者は消えた。「クセス住民にとって、クリスマスがきたようでした」とある援助職員は言う。「難民危機のおかげとはいえ、地元がこんなに潤ったのは初めてでした。」

難民を乗せた何千台ものトラクターが町にあふれた。イタリアは、廃坑近くにハイテク・キャンプを設置。アラブ首長国連邦も、立派な病院を備えた「豪華キャンプ」を作った。数万人は、バスや軍のトラックでアルバニア内地に運ばれた。美しい光景ではなかったが、移送は予想以上にうまくいった。それ以外の難民の多くは、一般家庭の世話になったり、周辺の7つのキャンプに移動。セルビア勢力の砲撃の射程内から出るように、というUNHCRの訴えは無視された。早く生き別れになった家族と再会してコソボに帰りたい。そのために出来るだけ国境近くにいたいと言うのだ。



UNHCR/R. CHALASANI

## ▶ 警告を無視して

早期帰還など一時はとても無理に思えたが、政府と援助機関は100万人近くの難民を越冬させるべく大規模な建設計画

を急ぎ、NATOとユーゴスラビア政府も和平に合意。その数日後、難民たちは「コソボが安全になるまで現在の場所にとどまるように」という警告を振り切っ

て、故郷へ向かった。

「モリーニの光景は、現実のものとは思えませんでした」と語るのは、コソボ住民の帰還を見ていたUNHCRのクリ▶

## 最初にコソボを逃れた人々

世界の注目が集まる前、すでにコソボから逃れていたアルバニア系住民は数十万人いた。

ガシが地下政治組織に加わり、政府の残虐行為に反対するデモに参加すると、セルビアの治安部隊は彼を探しにやって来た。

事前に兄の警告を受けたガシは国境へ向かったが、パスポートと全ての外貨を押収されてしまった。しかし密出国を試みた2度目は成功。スロベニア、オーストリア、そしてドイツを経て、ようやくスイスにたどり着いた。妻と4人の子どもはコソボに残った。

ガシの話は、今年コソボを逃れた難民約100万人の誰かの身のう上話に思えるかもしれない。

しかし彼がセルビア当局に抵抗して、自由をめざして逃げたのは10年前、1990年のことだ。

今年3月にNATO軍の空爆が始まると、コソボ住民数十万人の窮状はメディアで大々的に報じられ、政治の注目を浴びた。だが、コソボ住民の大量流出は90年代を通じて起きていた。外の世界は気づかなかっただけなのだ。

「99年の難民」はすでに大部分が帰還したが、「10年前の」避難民たちは今後どうなっていくのだろうか。帰還を望む人はいたいどれくらいいるだろう。彼らが現在暮らす国は、帰還か残留かの選択をさせてくれるのか。長く故郷を離れていた彼らと彼

らの子どもたちは、変わり果てた故郷に帰って溶け込んでいけるのか。

アルバニア系住民のコソボ脱出が始まっ



ババリア（ドイツ）の受け入れセンターに来た10年前のコソボ避難民。

たのは、89年にユーゴスラビア連邦共和国（当時）のミロシェビッチ大統領がコソボ自治州の自治権を大幅に縮小し、活動家の弾圧を始めた直後のこと。以後10年間で、多くの人々が主に西ヨーロッパに逃れた。

ヨーロッパで庇護申請をしたユーゴスラビア人は、80～88年は4万2000人不足だったが、89～98年には79万3000人に激増。このうち35万人は、コソボ出身のアルバニア系住民だった。

ほとんどは親戚がいるドイツとスイスに移住したが、その待遇は「99年の難民」に対するのとは大違いだった。難民と認定されたのは希望者の10パーセントにも満たず、コソボ出身者は密航と麻薬組織と結びつい

ているというレッテルを貼られていた。

拒絶された庇護

コソボの銃前屋だったガシは90年に脱出したが、スイス当局は庇護を拒否。彼を追ってきた二人の子どもも同じ目にあった。以来、彼は仮滞在許可のままジュネーブで不安定な暮らしを続けており、強制退去の不安におびえながら、なんとか家族を養っている。

彼は、現在の難民の待遇に呆然とすると同時に皮肉な気持ちでいっぱいだった。「当時は、私たちが受けた弾圧と大虐殺を信じる人はいませんでした」とガシ。「NATOが関わってくるまで、ヨーロッパの人は何も知らなかったし、知ろうともしませんでした。その態度が180度変わったのです。個人的には「裏切られた」気がすると言う。

ガシは年内には故郷へ帰るつもりだ。「いくつ問題はあるでしょう」と彼は言う。とくにジュネーブで都会暮らしに慣れた二人の子どもは、田舎の単調な暮らしに戻らなくてはならない。「でも後悔はしません。私たちの未来はコソボにあるのですから。」

ガシと同時期にコソボを後にした多くの住民も、いつか進んでコソボに帰るだろう。そしてヨーロッパ諸国の政府は、すでにヨーロッパに生活の基盤を築き、残留を希望するコソボ出身者たちにも、「NATOと国連がコソボの安全と治安を保証しているのだから」と、帰還を促すに違いない。■

ス・ジョノウスキ。「巨大なドクロマークが地雷の場所を示していましたが、アルバニア系住民はVサインをして帰って行きました。ある老人は『地雷など、構うもんか。セルビア人さえないなら』とっていました。」

「帰還民を数えていた援助職員も、すぐに諦めました。4人乗りの(ユーゴの国産自動車)ザスタバは9人を乗せて、屋根にマットや家具を積み上げ、地面をこすりながらギシギシ音をたてて走って行きました。みな家路を急いでいて、国連の食糧配給所も素通りです。」

「お手上げです」と、別の援助職員も恐れなした様子で言う。「流れに身をまかせるしかありません。」

しかし警告は本当だった。最初の数週間で多くの人々が死傷した。数十万個の地雷のほかに、NATO空爆の不発弾(とくに危険なクラスター爆弾)も残っていた。地雷の専門家によれば、コソボはボスニア、カンボジア、アンゴラと同じくらい危険で、比較的安全と言える程度になるにも30年近くかかるという。

危機が新たな段階に入ると、緊急時と同じくらい大きく複雑な問題が出てきた。UNMIKは、地雷の危険と越冬問題に加えて、どうやって、残虐行為に脅える何万人ものセルビア系住民とロマを戻すことができるだろうか。

セルビア系住民とロマの不満に対処しない限り、コソボに永続的な和解はありえないといわれる。しかし数年前のボスニア紛争で、旧ユーゴ内に避難した何十万人もの人々(セルビアとモンテネグロに50万人、クロアチアとボスニアにその他多数)が、いまだに故郷に帰れない現状を考えると、コソボでの民族共存も簡単にはいきそうにない。

今年避難を強いられたアルバニア系住民の大部分(暫定的避難先として世界29か国に移送された9万人以上も含め)は、秋までに帰還したか、または帰還の意思を表明している。しかし1990年代初めに故郷を逃れた推定35万人のコソボ難民たちはどうなるのか。すでに何年か暮らし



UNHCR/M. VACCÀ  
コソボで最大の被害を受けた町のひとつペチで、帰還民に援助物資が配られる。

てきたヨーロッパ諸国で永住を認められるのだろうか。もし帰還しても、うまく共存していけるのか。

空爆の効果はさておき、  
現実に危機が起きたとき、  
人道行動が全般に  
うまくいったのは明らかだ。

今回はデイトン合意なしで

カール・ビルト国連事務総長特使によれば、ボスニアの場合、公式かつ拘束的なデイトン和平合意があったが、コソボにはUNMIKが頼りにできる枠組みがない。このため、任務は一段と困難だ。

国土への影響は甚大だ。ユーゴ政府は空爆のため機能不全に陥り、世界ののけ者にされている。モンテネグロとマケドニアの政情も不安定だ。アルバニアは、いまだにヨーロッパの最貧国。ボスニアは2万人のコソボ住民を庇護しており、国内は相変わらず地域情勢に左右されやすい。世界の注目がコソボから移ってしまったら、人道援助と長期的復興に必要な資金がもたらえなくなるのでは、という

懸念もある。

人道援助全般で見ると、コソボでみられた二国間プロジェクトを優先する傾向は、今後の緊急事態やUNHCRなど援助機関の財政にどのような影響を与えるのだろうか。戦争の当事者と主要援助当事者というNATOの二面性は、今後の人道・軍事協力にどう影響するのか。

NATO空爆の是非をめぐる論争は永久に続きそうだ。あれしか方法はなかったのか。それともベトナム戦争の時のように「村を救うために村を破壊する」戦略だったのか。

ともあれ、現実に危機が起きたとき、人道行動が全般に成功を収めたのは明らかだ。対応の遅れはあったが、100万人近くの難民が実際に援助を受けた。もちろん地元政府と受け入れ家庭も大きな役割を果たしたが、振り返れば無数の難民がコソボを離れてすぐに身を寄せる場所、食糧、医療を受け取った。死者も予想より少なかった。

そして難民たちは、帰還すると元気に自宅を修理する底力をみせた。それはバラバラになったコソボをまとめるうえで、重要な役割を果たすだろう。■

# バルカン半島情勢

## ベオグラード



**1** 1989年、ミロシェビッチ率いるセルビア共産党員たちが、ユーゴスラビア全土における「セルビア人の権利を守るため」ベオグラードをデモ。民族主義感情が高まるなか、旧ユーゴスラビア政府はコソボ自治州の権限を大幅に縮小。コソボのセルビア系住民とアルバニア系住民の亀裂が決定的に。

© C. CUPIC

## プリシュティナ



UNHCR / M. SHINGHARA

**2** 1998年、戦闘はコソボ全土に拡大。この年、UNHCRはコソボ自治州内で約40万人を援助した。写真は、配給前に物資の備蓄をチェックする援助職員。

ボスニア・ヘルツェゴビナ

モンテネグロ

サラエボ

ポドゴリツァ

シュコデール

## セルビア



**9** コソボ難民の帰還にともない、報復を恐れる約20万人のセルビア系住民とロマがコソボから逃れた。国連職員はコソボ残留を訴えたが、大部分は写真のセルビア系住民のように、セルビア支配地域に避難場所を求めた。

© M. BRASIC

イタリア

## セルビア



**8** NATO軍の空爆は、誤爆を含めセルビア全土に大きな被害を与えた。難民の住居用にUNHCRが修理したスルドイツァ町のサナトリウムは、ミサイル3発を被弾して破壊され、暮らしていた難民16人が死亡した。

© M. BRASIC

ティラナ

5

## コソボ



UNHCR / R. CHALASANI

**7** 6月初め、コソボ紛争に終止符を打つ合意が調印された。以後数週間で難民の大部分が帰還。過去数十年で、最速・最大規模の帰還となった。



1999年の6か月間にヨーロッパに庇護申請したユーゴスラビア人は6万7000人以上（主にアルバニア系）。

キューバのカストロ大統領が、コソボと旧ユーゴスラビア地域に対して医師1000人の派遣を申し出た。

欧州連合（EU）はコソボ再建のため、向こう3年間に年間5億ドルの支援を約束。

世界食糧計画（WFP）は、ユーゴスラビア（コソボを含む）ボスニア、クロアチアの250万人に対する食糧支援計画を発表。



1

ベオグラード

8

ユーゴスラビア連邦

9

7

ミトロビツァ

2

プリシュティナ

コソボ

ペチ

プリズレン

スコピエ

クケス

4

マケドニア

6

コルツェ

アルバニア

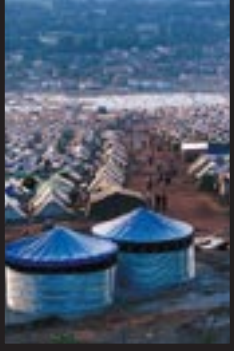


6 アルバニアに到着した難民の大部分は、地元の家での世話になった。写真は、アルバニアの町パイラムキュリで、滞在先の家族とポーズをとる老夫婦と孫たち。

ギリシア

ルーマニア

マケドニア



4 マケドニアに逃れたのは約25万人。多くは帰還の時まで、ケグラネに作られたような（写真）急ごしらえのキャンプに滞在した。

ソフィア

ブルガリア

イギリス



5 すでに満員状態のマケドニアに到着した避難民のうち9万2000人近くが計29か国に一時的に移送された。写真のコソボ難民はイギリスに向かっている。

- ← アルバニア系住民の流出経路
- ← 難民たちの帰還経路
- ← セルビア系住民の流出経路

# 危機の原点

UNHCRが経験した  
もっとも困難・複雑な活動

## ニコラス・モリス

2年前にコソボ危機が世界の注目を集めはじめたとき、事態は主に人道援助と復興の視点から報じられた。しかし緒方貞子・国連難民高等弁務官は、1998年9月という早い時期から、「コソボはきわめて人道的な影響をともなう政治問題であり、政治的解決しかありえない」と述べていた。この問題の中核には、長期にわたる人権侵害が

あったのだ。

98年2月、著しい人権侵害をしてきたユーゴスラビア軍とセルビア治安部隊が、コソボ自治州全体で勢力

を伸ばしていたコソボ解放軍(KLA)と衝突。爆発寸前の情勢は新たな段階に入った。この時点では、援助はさほど必要ではなかった。

98年7月の攻防で、セルビア治安部隊は多くの重要地点で支配権を奪還。KLAを支援している疑いのある市民に対して、集団処罰と称して激しい弾圧と強制移住を展開した(ただしKLAにも人権侵害の責任はある)。

98年9月末までに、コソボ内外への避難を強いられた人は35万人以上に達した。緒方弁務官は、ユーゴスラビア政府がアルバニア系住民の処遇を根本的に変えないかぎり、公正で永続的な解決策はありえないという結論に達した。

国連安全保障理事会は、9月の決議1199号でセルビア治安部隊のコソボ撤退を要求。KLAの存在感が強まるなか、欧州安保協力機構(OSCE)が非武装の停戦合意検証団の先遣隊を送り、多くの避

難民は帰還をはじめた。

解決策はない

しかしこれが長期的な政治的解決策ではなく、一時しのぎに過ぎないことは誰の目にも明らかだった。停戦合意は12月末には破られ、セルビア治安部隊はKLAの拠点を狙った「冬の討伐」を開始。新たな避難民が生まれた。

99年2月、ランブイエ(フランス)で和平交渉が始まったが、暴力と避難は止まらず、2月23日に話し合いが物別れに終わるといっそう激しくなった。3月に国

連と非政府組織(NGO)が一時撤退を余儀なくされると、推定26万人がコソボ地方内で避難し、10万人が周辺地域に逃れ、1998年以来外国(主にドイツとスイス)に庇護を求めた人はほぼ10万人に達した。

UNHCRは、99年初めまでにコソボ地方内で推定40万人を援助。

これに先立つボスニア紛争の時と同様、国際的な輸送隊を組織して民族の区別なく援助した。ただしボスニア紛争の時と違って、輸送隊や人道職員は避難民との接触をほとんど制限されず、セルビア系住民にも容易に援助ができた。

しかし同時に、政治行動をとまわらない人道活動の限界が改めてはっきりした。

NATO軍の空爆期間中、コソボから逃

れたか移送された住民は約85万人に達し、UNHCRはこれまでになく困難で複雑な状況に直面した。実務上の問題も大きかったが、当事国の利害関係が複雑にからみあう政治状況下では、もっと大きな問題もあった。

マケドニアは難民の庇



UNHCR/R. LEMOYNE

護に消極的だった。一方、ユーゴスラビア連邦の一部であるモンテネグロの場合、政府が難民の保護に前向きでも、駐留しているユーゴ治安部隊が難民たちを脅かした。KLAは活発に徴兵を行ない、多くの家族が避難中に引き裂かれた。

いちばん直接的な問題は、欧米の政策当局、コソボのアルバニア系住民自身、そしてUNHCRのいずれも、これほど大規模な住民排斥を予想していなかったことだ。難民が流出する数日前まで、主な西側政府は平和を確信し、ランブイエ和平合意の早期実施をUNHCRに急かしていた。

### 平和推進の失敗

ところがこうした国々は、難民が実際に近隣諸国に流出しはじめると、UNHCRの準備の悪さを厳しく批判した。



ランブイエ(フランス)での和平交渉が物別れに終わり、NATO軍の空爆が始まった。

KEYSTONE/AP/AM EULLER



## 責任分担

「責任分担」は、何年も前から人道会議の話題にのぼっていた。しかし庇護国が、資金面だけでなく、庇護の面でも拠出国の負担を願ったところで、普通それを現実にする力はない。

しかし国内にNATO軍を駐留させていたマケドニアは違った。難民の第三国避難計画を国境開放の条件にしたのだ。

対象者の選別は保護問題上の危険をは

らんでいたが、計画の発想自体は新しくなかった。これは第三国定住でもないし、一時的保護でもない。計画に参加した国の一部は、完全な難民の地位付与につながる恐れがあるとして、移送されてきた避難民と家族(配偶者も)の再会を禁止するなど、責任を限定したかった。

皮肉にも、コソボからきた庇護希望者を保護し、追い返さないでほしい、というUNHCRの求めを尊重してきた国々が、NATO軍の空爆後は制限的な措置をとるようになった。コソボ難民は迫害を逃れてきたのではないから、難民としての保護を受ける資格がないという主張まで飛び出し、UNHCRは対応に追われた。

コソボとボスニアはよく比較されるが、根本的な違いは忘れられがちだ。ボスニアの場合、UNHCRの活動は、ある意味で政治的行動の代わりだったから、その成功が主要国政府にとって重要だった。

一方、コソボ難民の流出は、主要国政府の政治的行動の結果であって原因では決していない。突然大規模な人道危機が起

きて、各国政府やNATOはそれを緊急に封じ込める必要に迫られた。人道活動はそうした政治的懸念の目的達成手段にされ、常にその下に置かれた。

## 政府の直接的関与

UNHCRが活動を管理し、比較的簡単に調整できたボスニアと違って、一部政府は人道活動に直接関与するようになった。そして自国の活動を目立たせ、迅速な解決を求めるようになった。

UNHCRはコソボ関連の人道活動を調整しなければならなかったが、「自由参加」の雰囲気なかで、その遂行は不可能だった。効率的な調整をせかす政府に限って、援助やキャンプ設置の二国間協定をまとめてしまい、UNHCRへの報告は後回しにした。

一部のNGOは、地理的な知識もなく、活動の経緯もニーズもきちんと理解せず、場合によっては必要な経験もないまま活動してきた。

大規模な緊急事態では、こうした混乱が初期に起きがちだが、今回はとりわけ

厄介だった。こうした経験から、UNHCRがまず目標と課題を明確に説明する重要性と、国連とパートナーとのチームワークの必要性が改めて認識された。

UNHCRは、今回の教訓を正しく分析して将来に生かすため、外部組織に活動の分析を依頼した。

断固とした政治行動がないために、困難な活動を強いられるという失敗の繰り返しからも、教訓が得られることを期待したいものだ。

ニコラス・モリスは、1993~94年、98~99年4月の二度にわたりUNHCRのバルカン地域担当特使を勤めた。本記事は、『Forced Migration Review』掲載記事の要約で、必ずしも国連の見解を反映するものではない。■

「自由参加」の  
雰囲気なかで、  
人道活動の調整は  
むずかしく  
不可能な場合も  
少なくなかった。

ウロセバツに援助物資の小麦粉が届いた  
(1998年)

だが、UNHCRが難民の流出を予測して支援を要請したところで、こうした国々は「私たちの和平努力が失敗するということのか」と要請に応じてくれなかっただろう。実際に起きた事件を考えると、まだ平和の望みがあるうちに、難民流出に備えた支援がなされるべきだった。

難民の流出当初、UNHCRは、不測事態対応計画や備蓄の不足よりも、熟練のフィールド職員と鋭敏な政治的決断が欠けていることを懸念した。

難民流出から1週間後、アルバニアとマケドニアにはすでに30万人が到着していた。4月3日、UNHCRは人道機関を最優先するという合意にもとづき、NATOに支援を要請した。マケドニアが難民受け入れを渋っていたため、コソボ・マケドニア国境で6万5000人が立ち往生していたのだ。マケドニアは難民受け入れの条件として、NATOによるキャンプ設置と、難民を第三国に一時的に避難させる計画を求めていた。

こうした軍事協力はUNHCRの調整のもとで実施したほうがうまくいくと考えられたが、様々な利害が絡み合った状況では、各国政府がUNHCRの言い分に耳を貸すとは思えなかった。



Kosovoから避難していくセルビア系住民。

## ヨ - ロッパの新たな人口流出

すでに難民50万人を抱えるセルビアに、 Kosovoから新たな難民がやってきた

「この道の先には何も無い。大きな監獄があるだけです。でも私たちは行くしかありません。」ディダッチ(45歳)は、そう言って、北のセルビアの方角を眺めた。その暗い瞳は、空ろで表情がない。やはりセルビア系の妻と子ども二人は、別の二家族とトラクターの荷台にうずくまっている。「私たちは永久に落ち着く場所がない運命なのでしょう。」彼はトラクターを前進させながら語った。

シワだらけのディダッチの顔には、彼自身の苦労だけでなく、バルカン半島の暗い歴史が深く刻み込まれている。彼は10年足らずの間に3度も難民生活を強いられたのだ。

ディダッチが生まれたのは、現在はクロアチア領のクライナ地方。95年にク

ロアチア軍が侵攻してくると、ディダッチ一家は17万人のセルビア系住民とともに故郷を追われた。セルビアの先祖ゆかりの地にたどり着き、ようやく安住の地

を得たと思ったのも束の間、 Kosovoの支配権を維持をしたい中央政府のもくろみで、 Kosovoに「移民」として送りこまれた。

しかし6月に入りアルバニア系難民が Kosovoに帰ってきはじめると、ディダッチも20万人のセルビア系住民と数万人のロマ(ジプシー)と同様に、「また出て行かなければ」と思うようになった。「私たちにとって、この世は永遠の地獄になってしまった。」そう言って、彼は膨れ上がる Kosovo脱出の波に加わった。

数千人のロマがイタリアへ逃れようとしたが、大半は追い返された。あるロマは、「私たちに祖国はないのです」と語る。「ただ風の吹くまま流されていくだけです。」



UNHCR/R. CHALANASI

厄介者あつかい

避難民20万人以上が、残虐行為を逃れてセルビアやモンテネグロをめざした。しかし戦いに敗れ、道路や水道も破壊され、高失業率にあえぐ国で、彼らはすぐに経済的な「お荷物」となり、厄介者扱いされるようになった。しかもユーゴスラビアは、すでに先の紛争で生まれた難民50万人以上をかかえるヨーロッパ最大の難民集中地帯だ。

ユーゴ政府は、セルビア系避難民をコソボに追い返す制度を導入した。コソボで住民登録を抹消しないかぎり、避難先で住民登録を受けられないようにしたのだ。

しかしこれは無理な要求だ。コソボには、もはや抹消手続きをする公務員がいない。だが新たに住民登録をしなければ、避難民は恩給も燃料の配給券ももらえないし、子どもを学校にもやれない。実際、こうしたセルビア系住民の一部がコソボに帰ったが、状況は脱出当時と何も変わっていなかった。

たとえ避難先で住む場所が見つかったとしても、その環境は劣悪であることが多い。シルコの古い校舎には難民120人が暮らしている。ある部屋では、コソボ出身の大人7人と子ども12人が4つのベッドで寝ていた。別の部屋では、手術を受けたばかりの女性が、9歳の娘、夫、祖父と一緒に骨組みだけのベッド2台に横たわり、トイレペーパーを枕にしていた。

「セルビア難民は人気がない」

1991年以降、UNHCRはセルビア共和国に逃れてきた難民を支援するため、約2億5000万ドルを投じてきた。しかしあ

る援助職員は言う。「正直言って、セルビア難民は世界の抛出国に人気がありません。集まった資金の大部分はコソボの再建にあてられ、セルビアにまわるのはその残りでしょう。」

なんとか新しい生活を切り開いたセルビア系難民もいる。セルビア共和国は97年に市民権法を導入し、約4万2000人に市民権と永住権を認めてきた。92年以来、ボスニアやクロアチア出身の難民1万3500人以上が、UNHCRのもと第三国定住を果たした。主な行き先はアメリカ、カナダ、オーストラリア、チリとヨーロッパ諸国だ。

一方、昨年未までにクロアチアとボスニアに帰った人は約5000人しかいない。帰還はNATO軍の空爆中も続き、815人

「正直言って、セルビア難民は抛出国に人気がありません。

彼らが手にするのは残り物だけでしょう。」

がクロアチアへ、35人がボスニアへ帰国した。

長く難民生活を強いられてきたセルビア系難民50万人以上は（今年に入ってコソボから新たに20万人が流入した）板ばさみの状況で暮らしている。昔ながらの故郷に帰れるのか、

それとも別の場所で新しい生活を始めるのか、いまま状況は不透明だ。

国連コソボ暫定統治機構（UNMIK）は、コソボの長期的な安定は、セルビア系住民とロマの帰還と再定着にかかっていると確信する。しかしそれは、旧ユーゴスラビアの他の地域での失敗例を考えると達成しがたい目標で、将来の潜在的な火種として残る可能性さえある。■

## 憎悪の海で守られる寛容の精神

大きく門戸を開きつづける小さな共和国

1990年代、旧ユーゴスラビアの多くの地域では、民族間の憎悪と排斥が激しくなった。しかし小さな共和国モンテネグロだけは例外だった。

はやくも91年、モンテネグロは旧ユーゴ全体を飲み込むことになる争いに関わるのをきっぱり拒絶した。在郷軍人たちが、旧ユーゴ軍にまじってクロアチアと戦うのを拒否したのだ。

戦闘が拡大するなか、人口わずか61万6000人のモンテネグロは、クロアチアとボスニア・ヘルツェゴビナから4万5000人も難民を受け入れた。しかも近隣諸国が民族的つながりのない人々に国境を閉ざしていた時期に、セルビア人もムスリム人も分け隔てなく受け入れた。

特に印象的だったのは、92年に政府が、海沿いに建つ裕福な旅行者向けホテルをムスリム人とセルビア人に開放したことだ。彼らはそれまで、劣悪な環境のボスニアの拘禁センターに収容されていた。

モンテネグロも正式にはセルビアとともにユーゴスラビア連邦を構成する。国内にはユーゴ軍が駐留しているし、ユーゴ警察が国境を管理している。しかし寛容な対応はコソボ紛争の時も守られた。

首都ポドゴリツァ（「山の下」という意味）の政府は、モンテネグロ自身の存続に関わる政治的な脅しに屈せず、コソボにおけるセルビア勢力の行為を公然と批判。洪水のように押し寄せてくるコソボ避難民を受け入れた。

美しい海岸と山と湿地の国モンテネグロに、まず推定7万人（ほとんどがアルバニア系）が避難してきた。その大部分が初夏までに帰還すると、代わってやってきたセルビア人とロマ約2万2000人も庇護した。

あらゆる戦争被災民に寛容なモンテネグロ政府の姿勢は、民族排斥が当たり前になったバルカン半島にあって、賞賛すべき慈愛の精神を示した。■

# 楽観的には とてもなれない

デニス・マクナマラは、コソボ危機が全面紛争に発展したときUNHCRのバルカン担当特使を務め、さらにコフィ・アナン国連事務総長のコソボ人道問題担当副代表に任命された。そのマクナマラに、初期に直面した問題と今後について聞いた。

コソボ危機は、何十万人もの難民の援助、洪水のような帰還民の支援、そして今度は越冬準備と、常に時間との戦いですね。国際社会の対応はいつも後手に回ってきました。

マクナマラ：50万人が10日間で避難し、50万人が2週間で帰還。どちらも誰にも予想できませんでした。対応が後手に回っても仕方ありません。

越冬準備は間に合うのでしょうか。

マクナマラ：この20～30年間、私たちは、コソボよりずっと多くの人々と、ずっと困難な状況に対応してきました。ですから今回も大丈夫でしょう。むしろ問題は、政治、安全保障、軍事の全体的環境、それに北大西洋条約機構(NATO)、欧州連合(EU)、国連など活動主体が多すぎることです。どうしたらうまくやっていけるのか……。

UNHCRは、コソボ難民流出の初期の対応を厳しく批判されました。

マクナマラ：もっともな批判もあれば、的外れな批判もありました。確かにもっと効率のかつ迅速に対応すべきでしたが、これほど大規模な流出は誰も予測できなかった。私たちは不測事態に備えるため、抛出国に支援を訴えていましたが、反応はありませんでした。こうした要素も考慮すべきでしょう。

UNHCRには伝統的な抛出国から資金が集まらなくなり、二国間援助が増えています。

マクナマラ：悪循環ですね。初期の批判

が資金の出し渋りにつながり、私たちは紛争の間ずっと資金拠出を訴えなければならぬという異常事態に陥りました。各国が軍事費には何十億ドルも費やしているのに、です。二国間援助の増加は世界的な現象です。どの国も、そのほうが国益にかなうと思うようになりました。だからNATOの戦後処理や、EUと欧州安保協力機構(OSCE)の組織には支援があるのに、UNHCRなどへの拠出はきわめて低調なのです。

そうした国々がUNHCRの主要抛出国であることを考えると、将来に懸念はありませんか。

マクナマラ：抛出国にも色々な意見があり、UNHCRの調整任務を支持する声もあります。しかし同じ組織が、援助機関に直接資金を提供したり、国連を避ける指示を出したりする。こうした矛盾はいつか表面化するものです。現在の状況がいつまでも続くはずはありません。

UNHCRは、コソボ危機の政治的・軍事的な複雑さと規模を過小評価していたのでしょうか。

マクナマラ：人道面では、私たちはもっと複雑な事態にも対応してきました。ただ、NATOの軍事行動開始後は、政治的な利害関係が大きくなりすぎて、私たちの手には負えなくなってしまいました。人道機関が圧倒され、何か間違いがあると都合のよいスケープゴートにされたのです。あれはメディア合戦、メディアの濫用でもありました。4か月間、連日朝



帰還した自宅に埋められていた地雷で、両足を失った13歳の少女（プリシュティナの病院で）。



から晩まで悪いニュースばかり。近年では実績と同じくらい、情報やイメージが重要です。私たちはそれを学ばなければなりません。さもなければ、蹴散らされてしまいます。

コソボでの人道機関と軍事機関の協力は、今後どのように影響するのでしょうか。  
マクナマラ：重要な問題ですね。コソボ紛争中は、何度も役割分担が改められました。NATOは人手も資金もこちらの100倍潤沢でしたから、軍事行動が終わると帰還のスケジュールを組み始め、私たちの任務に口を挟んできました。けれども結局彼らは、軍事力だけでは危機を解決できないと分かって、あとを国連に任せたのです。NATOにとっても国連にとっても難しかった。将来の協調に影響を与えるのは間違いないでしょう。

地雷問題の解決は長くかかりますか。  
マクナマラ：最近、第二次大戦中の不発弾がロンドンの空港で発見されました。コソボも同じでしょう。ただ、不発弾は地雷よりも大きな問題かもしれません。どこにいくつあるのか分かりませんから。コソボの場合、何年もかかるのではないのでしょうか。

緊急援助と長期的な復興の間に深い溝があるようですね。  
マクナマラ：人道援助では、市民社会の再建を真っ先にすすめるてはいけません。抛出国は、援助職員だけでなく、道路や発電所、司法制度や警察を建てなおす人を送るべきです。権力の真空地帯に無法状態が広がらないように、私たちと現場で活動すべきです。

コソボは多民族共存地域に戻るのでしょうか。  
マクナマラ：報復ムードがあるのは事実です。この反目に終止符を打てるかどうかは分かりません。ただ、「保護」には物理的な保護と包括的な法的保護の側面があります。コソボではそこに大きなギャップがあり、民族共存に致命的な影響を与えかねません。

バルカン半島では、ひとつの難民流出が新たな難民流出をもたらすようです。

この連鎖を断ち切れるのでしょうか。

マクナマラ：すでに何十万人も帰還しましたが、紛争で新たに20万人の難民が出ました。連鎖は続いています。とても楽観は出来ませんが、確かに人々の安住は人権と民主主義の基盤です。

抛出国は資金の使い道を指定し、セルビアにいる何十万人もの難民はすでに忘れられかけています。これは新しい危険な傾向ではありませんか。

マクナマラ：使途特定資金には、明らかに政治的背景があります。UNHCRは1992年以来、セルビア難民に3億ドルを投じてきました。しかし新たなセルビア難民と、セルビアの劣悪な環境下で暮らす長期的な避難民のために新たな資金を調達するのはずっと難しいでしょう。

難民の大部分が帰還した今、UNHCRのコソボにおける中・長期的役割は何ですか。

マクナマラ：私たちは越冬準備を進めています。故郷に帰らず、アルバニアとマケドニアにいる難民の支援も続けなければなりませんし、ヨーロッパ、オセアニア、北米に行ったコソボ住民のケアも必要です。UNHCRの関与は長期にわたるでしょう。

多数のコソボ住民を受け入れた周辺諸国はどうでしょう。

マクナマラ：基本的には、「あなたがたは忘れられてはいません」と言いたい。UNHCRとしては、「あなたがたのために頑張ります」。これら諸国は、約束したはずの経済援助がないと怒っています。ヨーロッパ諸国の投資が必要です。

しかし過去にもありましたね。危機が終わり、テレビカメラが去ると、世界は忘れる。

マクナマラ：コソボは簡単に忘れ去るには政治的に重要すぎます。政治家たちは、テレビで恥をかくと行動を起こすものです。ただ、国際問題は聞こえのいい文句やイメージでは対応できません。私たちは原則を守ってコソボ紛争に対応してきました。今度は同じ原則を守りつづけて、将来に向けて投資しようではありませんか。■

# 軍との協力を学ぶ

兵士と人道職員が協力するのは難しいが、お互いがお互いを必要としている。

## セドリック・ソーンベリー

兵士と人道職員といえど、平和と人道という大義のために行動を共にするならば対立するとは限らない。

両者は互いを補いあい、大規模な災害の影響をやわらげることができる。専門とする分野は違いますが、ゴールはひとつだ。

10年前の東西冷戦の終結で、国連の平和維持活動は、ナミビアと中米を皮切りに複雑な段階に入った。政治、軍事、警察、人道、法的、開発など多数の任務が課されるようになったのだ。

以後、国際社会は旧ユーゴスラビアからルワンダまで激しい内戦に巻き込まれるようになった。UNHCRも、多くの国連機関、政府間機関、非政府組織(NGO)とともに、平和維持活動の「常連」になった。

各組織にはそれぞれ独自の任務と中核事業があり、それが摩擦のタネになる場合がある。たとえばナミビアで、

UNHCRは任務上、帰還民の生活に活動の重点をおいたが、それはすべてのナミビア人に公平に対応するという国連ナミビア独立支援グループ(UNTAG)の方針と相容れなかった。

軍と文民の摩擦はどうだろう。軍の仕事はUNHCRなど人道機関の救援活動をサポートすることで、UNHCRも軍の安全保障任務に介入しないから、理論上は摩擦が生じるはずはない。しかし危険な環境下では、平和維持部隊がUNHCRとの協力を命じられる場合がある。軍が人道機関の輸送・供給能力の補充を求められる場合もある。

## 分離は困難

このように文民と軍事の任務は重なる部分があり、現実には完全に分離することはできない。たとえば住民が餓死しつつある村に物資を届けなければならない場合、救援トラックのルートを「危険」と評価した軍の判断は、どの程度重視されるべきなのか。

4年前、UNHCRは二つの小冊子を作成した。『人道活動における軍に関する



ステンコベツ第二キャンプ(マケドニア)で難民にパンを配るイギリス兵。

UNHCRハンドブック』と、UNHCR職員の研修科目になっている『軍と行動する』だ。これらはいまま今日の意味をもち、軍と人道活動の基本事実をわかりやすく説明している。

たとえば多くの人道職員は、軍人に比べて若くて経験不足と思われる。一方、兵士たちは、複雑な問題に直面しても、極度に単純化された、短期的で攻撃的な解決策を求めると思われがちだ。基本的な発想が異なる場合も多い。トレーニング、経験、意思決定に対する多様なアプローチ、資源の利用、命令と管理などの違いが、お互いの理解をむずかしくし、

固定観念を助長する。こうした現実を無視するのは間違いだろう。

人道機関どうし、国連機関どうしの協調は、国連人道援助調整室(OCHA)の強化により改善されるはずだが、文民と軍の関係は見直しが必要であり、21世紀の大きな議題になるだろう。

軍と文民の双方にとって一番必要なのは、平和維持活動の学習と、十分な情報にもとづく(とくに現地での)リーダーシップだ。偏見や誤解の多くは、相手の任務と価値観に対する無知が原因となっている。

北大西洋条約機構(NATO)は近年、大規模な平和維持活動で、主要援助機関の十分な支援を得ないで人道活動と文民の役割を果たそうとしてきた。

こうした深い溝を埋めるのは簡単ではなさそうだ。そこには二つの構造的問題がある。

ひとつの平和維持活動のなかで、単一の命令系統に人道職員と兵士がそれぞれ対応すると、良好な協調関係を維持するのはむずかし

くなる。他方、バルカン半島がそうだったが、軍と文民の活動領域をあらかじめ分けてしまうと、危険を増長するだけのようである。

兵士と文民は、決して協力できないわけではない。互いに話し合い、相手の任務と専門性を理解し、尊重する機会と後押しが必要なのである。

セドリック・ソーンベリーは、1992~94年に旧ユーゴスラビアの国連事務総長補(民政担当)をつとめ、キプロス、中東、ナミビアにおける国連平和維持活動にも参加した。■





UNHCR/F. DEL MUNDO

1999年1月、ラチャック村の虐殺で45人が殺された。

## 見たことのある風景

再訪したコソボには、活気と楽観論があった。

### フェルナンド・デル・ムンド

徹底的に破壊されたロジャの廃墟から、強い復興の意思が伝わってくる。多くの住民が、仮住まいにする学校を忙しそうに修理する一方、コソボ第二の都市ベチの中心部にある自宅の再建をすすめている。UNHCRは市民に工具一式を提供し、別の援助機関が電気や水道設備を

修理した。ある70歳の女性は、内部を破壊された家の前に立ってため息をついた。「私の人生のすべてなのに……この家を建てるために何もかも費やしたのよ」。しかし娘が泣き出すと、怒ったように黙らせた。たとえ絶望的な気持ちでも、復興は続けねばならないのだ。

これは昨年、私がUNHCRのフィール

ド職員としてロジャを訪問したとき見た光景だ。セルビア民兵による空と陸地からの攻撃で、100軒の家屋すべてとモスクが瓦礫の山と化していた。

多くのアルバニア系住民がコソボに帰還したのを受け、私は再びロジャを訪れた。そしてすぐに「この光景は前にも見たことがある」と思った。

確かに、破壊の程度は以前よりはるかに激しい。貴金属店や洋服屋が建ち並ぶベチ市街は見る影もない。しかしそこには、昨年と同じあの活気があった。44歳のアルバニア系男性は、妻と四人の息子と自宅の被害状況を調べ、なお希望にあふれている。「まず私たち自身がしっかりしなくては」。彼はそう言って、出来るだけ早く工務店を再開する計画を話してくれた。

コソボを知る人なら、何十万人もの難民が、帰還はもう少し待つよという国際社会の訴えを無視したのにも驚かないだろう。1998年、セルビア治安部隊とコソボ解放軍(KLA)が激しい戦闘を繰り広げるなか、一般市民は、なるべく自宅近くの村から村へあつという間に移動した。そして戦闘が小康状態になると、素早く故郷に帰っていった。

### 小さな土地

コソボは決して広くない。ロジャの廃墟で出会ったアルバニア系男性は、98年9月に私をクルセバツ村で見たと言う。当時、アルバニア系住民2万5000人以上がセルビア治安部隊の攻撃から逃げていた。そのアルバニア系男性はKLAの兵士で、クルセバツの真南にあるイスチニツでも私を見たと言う。セルビア勢力が道路を封鎖したため、住民たちが立ち往生していた場所だ。

当時、UNHCRが援助していた避難民は約40万人。地元採用者を含む職員たちは、一般車両で移動し、人々のニーズを調べるために国際監視団が決して行かない場所にも足を伸ばした。

1998年の春以来、私たちはほぼ毎日トラック隊を走らせた。NATO軍の空爆を

前に撤退を命じられた時は、同僚のフランシス・テオが最後のトラック隊を率いた。

ミトロピツァ町からアデ村ま

では通常30分だが、その日は11の検問所に引っかかり、数時間かかってしまった。ある防塞で、特殊部隊が運転手のひとりをお殴りつけ、割って入ろうとしたフランスもカラシニコフ銃で腹部を殴られた。しかし彼は、「ネマ・プロブレマ(大丈夫)」と笑みを浮かべて張り詰めた雰囲気なごませた。彼のユーモアのセンスがまたもピンチを救ったのだ。

その晩、マケドニアへ脱出する指令が出た。私たちのほとんどは、数日もすれば戻ってこられると思っていた。しかし空爆は2か月半も続いた。

そしてコソボに戻ってくると、援助の相手が変わっていた。もちろん避難民の

「戦争は戦争。

みな痛みは同じだ。」

援助は続けたが、現在の主な保護対象は飛び地、とくにいつの間にか多数派のアルバニア系住民に包囲されていたセルビア系住民とロマ(ジプシー)の居住地だ。

この逆転現象をみて、コソボでUNHCRの活動を指揮していたジョー・ヘネナウアーの言葉を思い出した。世界の他の地域と比べた時、ヨーロッパの紛争に巻き込まれた人々の苦難には何か違いがあるか、と聞かれて彼はこう答えた。「戦争は戦争。痛みは同じだ。」

今年3月、空爆前のコソボで最後の調査に出た私は、特殊部隊にプリシュティナ近郊の村を襲撃され、おびえた村人100人が二つの家に押し込められている

のを見た。私が撮影したビデオテープは、覆面兵に奪われてしまったが、ある将校が済まなさそうに返してくれた。「コソボにはみんなが暮らせる十分な土地がある」と将校は言った。

「しかしこの泥沼は、私たち全員を飲み込もうとしている。そう言って、彼は足元の泥のなかでブーツをよじらせた。

今回私がコソボを立ち去るとき、セルビア系農民14人が正体不明の男たちに虐殺された。コソボ紛争を決定的なものにした事件のひとつに、ラチャク村でのアルバニア系住民45人の虐殺事件がある。この事件は世界中の非難を浴びた。

今度はアルバニア系住民が自責の念にかられる番だ。「なんてことだ」。KLAの兵士だったという男性は言った。「これではセルビア系住民と同じじゃないか。」■

## 人々を救って... しかし自分の命を失って

地元の慈善団体が、大きな代償を払いながら老人や体力のないコソボ住民を助けた。

コソボ紛争で何十万人もの人々が故郷を逃れるなか、各村や町には残された人たちがいた。高齢や体力がないため避難できなかったか、生きる希望を捨ててしまった人たちが。身の回りのことが出来ないため、「餓死する恐れがあることがわかってきました」と、マザーテレサ協会のファティマ・ボシャニヤクは言う。

同協会はアルバニアの慈善団体で、今年に入って50万人を援助した。しかしNATO軍の空爆が始まり、セルビア勢力の民族浄化が激しくなると、援助も続けられなくなってきた。

それでも何人かのボランティアはとどまり、食糧が乏しくなると、小麦を求めて廃墟を歩き回り、老人たちの食べ物を確保し

ようとした。

彼らは多くの命を救ったが、代償は大きかった。ジャコピツァの町では、職員6人が殺され、2人が負傷し、6人が捕虜となって拷問され、9人が行方不明になった。コソボ地方全体の死者や行方不明者は100人にのぼる。

マザーテレサ協会は、  
98年までに50万人を助け、  
UNHCRの重要な  
パートナーになった。

マザーテレサ協会は、アルバニア人で、カルカタ(インド)で貧しい人々のために尽くしノーベル平和賞を受賞した故マザー・テレサの名前を取って90年に設立された。この年、同協会のボランティアは推定1万5000人(大部分が失業者の家族)を支援した。

ボランティアのネットワークは98年までに急拡大し、援助可能人数も50万人にな

り、UNHCRの重要なパートナーになった。

NATO軍の空爆が始まるまで、さまざまな機関のトラック隊が、食糧、毛布、マットレスなどの物資を同協会の倉庫に運び込んだ。そこからは、ボランティアがトラクターで物資を遠隔地に運んだが、多くはセルビア治安部隊の妨害にあった。

危険な仕事だった。昨年8月には、3人のボランティアが殺されている。救援物資の箱には援助機関のロゴがはっきり表示されていたのに、セルビア部隊の標的にされたのだ。

事態が悪化すると、マザーテレサ協会の倉庫はほぼ全部略奪され、放火された。破壊された診療所は92か所中78か所。22人の職員と8000人のボランティアの大部分は近隣諸国へ逃れ、そこで救援活動をサポートした。

現在、マザーテレサ協会は活動を再開。ボランティアの大半も戻ってきて、事務所は44か所中38か所、支所は636か所中500か所が再開された。「状況は良くなりました」と同協会のジャク・ミタ副会長は言う。「自由に活動ができますから。」■

# 葉と根を食糧に

世界に忘れられた危機

ピーター・ケスラー

世界の注目がコソボに集まるなか、ジュスティヌ・ココロと7人の子どもたちは、アフリカ中部のコンゴ共和国で、タビオカの木の新葉と根を食いつないで暮らしている。一家は1998年末、政府軍とゲリラ勢力の戦いが再燃したため、首都ブラザビルを脱出。しかし避難先で待っていたのは、同じような地獄だった。

一家が逃れたのは、湿原が広がり、荒

れ果てたブル地方の南部。避難民（政府の概算では同地方だけで20万人。ただし援助機関はその半分とみている）は、森をさまよひ、農作物を拾って命をつないでいる。国連の施設があるから安全と思ってきたのに、栄養失調は増え、子どもたちはどんどん死んでゆく。

だが、食糧はコンゴ避難民がかかえる問題のひとつにすぎない。ブル地方では、反政府民兵組織「ニンジャ」が暗躍している。「ニン

ジャ」は、ベルナルド・コレラス元外相の権力闘争を支えており、政府軍ヘリコプターの攻撃に対して一般市民を「人間の盾」にしているといわれる。その多

くは麻薬を常用し、ブル地方全体を荒らしまわり、わけのわからない条例や命令を出す。

コンゴ情勢は、アフリカでもとくに危険で対応が難しい。それなのに、この国の話題が世界の新聞で取り上げられることはほとんどない。コソボ問題のように「派手な」危機が、マスコミの注目だけでなく援助資金までさらってゆき、ジュスティヌ・ココロ一家のような人々は、家もなく、日々の食べ物にも困ったまま一生を過ごすことになるのではと人道職員たちは心配している。

人影のない町

ブル地方の情勢はきわめて悪く、ジュスティヌ一家は危険を承知でブラザビルに帰る決心をした。だが首都はもぬけの殻だった。ひとけの無い大通りには朝から晩まで銃声が響き、食糧はいつも欠乏状態。多くの建物はえぐられるように破壊されている。ジュスティヌがいる一時収容センターは、建設が途中でストップした総合スポーツ施設で、他のセンターと同じように繰り返し略奪を受けた。バスケットボールのコートに2000人が寝

泊まりし、陸上のトラックは荒れ果てている。

ジュスティヌは、少しでも危険でない場所はどこか何度も考えた。一家には毛布もなく、不満が口をつく。「ブラザビルの暮らしはひどいものです。（ブル地方の）口モウに戻りたいのですが、行く

アフリカで最も危険で厳しい状況にある場所のひとつなのに、世界の新聞では決して取り上げられない。

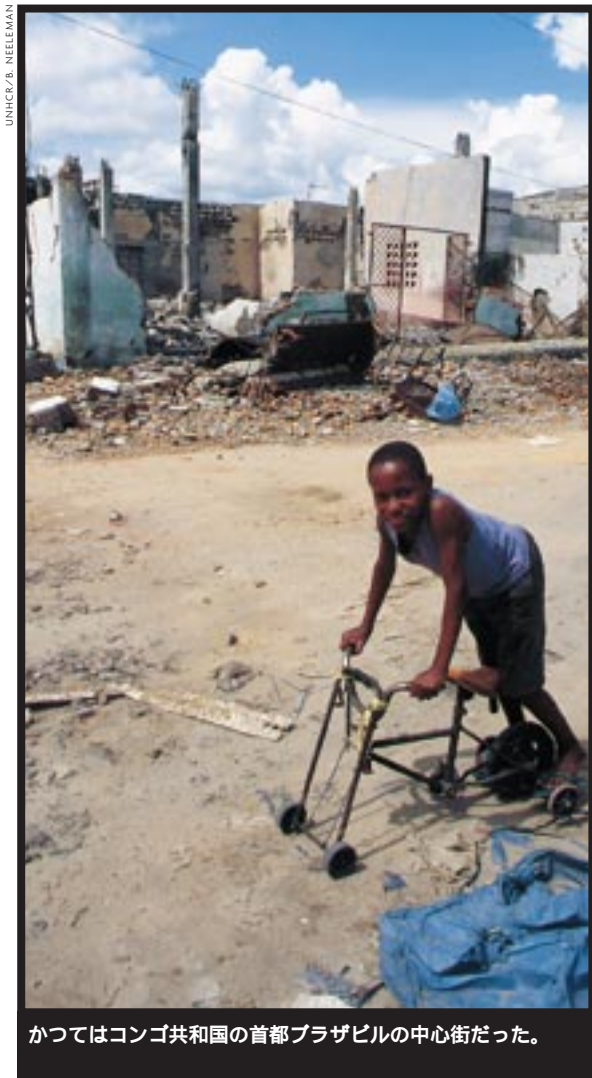
手段がありません。」

1999年に入ってから、栄養失調のコンゴ難民約3万5000人が、隣のコンゴ民主共和国（同国も混乱状態にある）に庇護を求めた。7月の第一週には、さらに2万5000人の精神的に傷を負った避難民がガボンに逃れた。

その一方で、UNHCRの警告にもかかわらず、4月以降少なくとも3万人がコンゴ民主共和国からブラザビルに帰ってきた。

かつて賑わっていたブラザビルに、もはや働き口はないに等しい。元公務員たちは、オフィスビルの影にしゃがみこみ、物々交換で必需品を手に入れている。

こうした人たちの大部分は、救済機関が支給する物資に頼って暮らしている。だが、追加資金を求める国連のアピールに反応はなく、状況が早期に改善される見込みは薄そうだ。■



かつてはコンゴ共和国の首都ブラザビルの中心街だった。

香港は、中国系ベトナム人ボートピープルが他のベトナム人と衝突したのを受け、第二キャンプを再開。

タリバンと北部同盟軍の新たな戦闘で10万人以上のアフガン人が避難。

## 庇護を求めて

### エチオピア

「アフリカの角」で活動再開

エチオピアからのソマリア難民の帰還は、ソマリア北部の情勢悪化を理由に1998年末以来凍結されてきたが、99年6月に再開された。UNHCRは12月まで週3回のトラック輸送隊を組織する計画で、年内に6万人以上を帰還させたいとしている。エチオピアは、1970年代後半のオガデン紛争、さらに1990年代前半の内戦でソマリアを逃れてきた難民のうち、いまも20万人を庇護している。

### アンドラ

小さな助けの手

フランスとスペインにはさまれたアンドラは、人口6万人と世界最小国のひとつ。しかしコソボ危機の初期、アンドラの国連大使はUNHCRに10万ドルを寄付。さらに医療援助を必要とするコソボ難民を10人までなら受け入れる準備があると述べた。アンドラが難民問題に関わったのは、これが初めてと思われる。

### 国連

紛争に終止符を

国連安全保障理事会は、戦闘当事者が調印した和平合意をサポートする努力の強化を呼びかけた。安保理は公式声明で、戦闘員たちがより確実に武装解除し、市民社会に溶け込んでいけるようにする「現実的措置」を提案した。また和平合意が結ばれ、国連の平和維持部隊が現地にいるにもかかわらず、最近の多くの紛争では、兵士たちが戦闘を続けている実情を指摘した。

## アフリカ

### 良いニュースと悪いニュース

1999年7月にアルジェで開かれたアフリカ統一機構(OAU)第35回首脳会議では、アフリカ難民にとって良いニュースと、悪いニュースがあった。良いニュースは、アフリカでもっとも複雑な三つの紛争、シエラレオネ内戦、コンゴ(旧ザイール)内戦、エチオピア・エリト

リア戦争が、わずかながら解決に向かっていくこと。情勢が安定すれば、数百万人が救われる。シエラレオネ内戦では、現在難民が45万人、国内避難民が数十万人出ている。「アフリカの角」で最近起きた戦闘を逃れてきた人々は60万人以上。アフリカ中部では、この数か月で少なくとも10万人がコンゴを脱出した。コンゴ国内では、70万人が避難したほか、周辺国からきた難民30万人がいる。

一方、悪いニュースは、和平合意が持続するかどうか不透明なことだ。和平合意後もコンゴからの流出が続いている。緒方貞子・国連難民高等弁務官は同首脳会議に出席し、「自分たちを哀れむのをやめ、(大陸全体の懸案事項である)大きな政治的・経済的課題に取り組もう、というアフリカ首脳の見解」がみられると評価した。「この新しい姿勢が、アフリカの未来の希望である。」■



兵器駆逐の様子を見守るシエラレオネ、ナイジェリア、リベリアの各国大統領。

## 世界

### 難民の統計

1998年、難民をはじめUNHCRが援助対象とする人は、前年比4%減の2150万人となった。最近の発表では、難民の数も同じく4%減の1149万1710人になったことを示している。UNHCRは、難民以外にも庇護希望者、帰還

民、国内避難民、戦災者を援助している。難民が最も減ったのは、南米とカリブ海地域で11%減。ヨーロッパは9%減、アフリカは6%減だった。しかし世界の庇護希望者は全体として38%増で、推定130万人となった。■

### グアテマラ

#### 故郷への最後の旅

1980年代前半以降、政情不安のため、グアテマラ難民4万5000人がメキシコに逃れた。しかし一部はごく短期間で帰還をはじめ、これまでに大部分が自力で、あるいは政府やUNHCRの支援の

もと帰国した。そして1999年6月24日、最後の難民167人が自発的に帰還し、UNHCRのグアテマラでの活動は成功に終わった。

「私には夢があります。障害者や戦争で傷ついた人々が参加する独自の組織を作ることです」と言うのは、16年間外国で避難生活を送った男性だ。「まだ安心はで

きません。(グアテマラで和平合意が結ばれた後)メキシコで何年か帰還を待ちましたから。でも、グアテマラで人生をやり直せると思います。」

一方、2万2000人は帰国しないことを決意。メキシコ政府は、彼らに完全なメキシコ国籍を提供し、すでに1200人以上が市民権を手にした。■

オランダは、庇護申請を却下された庇護希望者を4週間以内に出身国に帰すと声明。

欧州連合（EU）は、タイ国境のキャンプに暮らすミャンマー難民のために470万ドルの援助金を承認。

アイルランドは、労働力不足を補完するため、一部の庇護希望者に就労許可を与えることを検討中。

1999年7月、反政府組織スーダン人民解放軍の徴兵を逃れたスーダン人多数が、隣国ウガンダに流出した。

## 米国

### 配偶者による暴力の犠牲者に壁

米連邦司法省の移民審判委員会は、夫の虐待を逃れてきた女性は、米国で庇護を受ける資格がないと判断。グアテマラ出身の女性ロディ・アルバラード・ペーニャの庇護を認めた1996年の決定を覆した。

夫は彼女を銃で殴り、頭を窓や鏡に打ち付け、レイプし、大量に出血するまで蹴り続け

た。グアテマラ政府の保護はなかったという。

米移民帰化局（NIS）は95年、性差を理由とする迫害を庇護の理由と認めるガイドラインを出したが、政府ではなく、配偶者の虐待を逃れてきた女性の扱いは不透明だった。

NISは96年の決定に対して審判を請求。移民審判委員会

が、アルバラード夫人は国際法および米国法が定める五つの理由（人種、宗教、国籍、政治的意見、または特定の社会集団のメンバーであること）に基づく被害を立証していないとして、10対5で庇護申請を却下した。ただし一部の委員からは、米国には「人間の個性の基本部分」を理由に迫害を受ける可能性がある人を保護する義務がある、という反対意見が出された。■

## マリ

### 反乱の終わり

1990年、西アフリカの国マリで遊牧民トゥアレグ族が反乱を起こすと、国全体が混乱に陥った。30万人以上が故郷を追われ、その3分の1以上がモーリタニア、ブルキナファソ、アルジェリア、ニジェールに逃れた。

UNHCRは90年代後半、同国北部への難民帰還と再定着を支援する、野心的な計画を実施。ガオ、キダル、モプティ、

セゲー、トンブクトゥ地方の帰還地638か所に約2億4000万ドルを投じた。99年6月末、アフリカ局長アルバート＝アラン・ピーター

スが、4年間の活動を総括し、経済刺激策と治安改善を訴える700ページの報告書をコナレ大統領に提出。UNHCRのマリ北部活動は正式に終了し



ガオ地方（マリ）の帰還民たち

た。UNHCRマリ事務所は、リベリア、シエラレオネ、および大湖地域出身の難民約2000人を支援するため、規模を縮小して継続される。■

## ソロモン諸島

### 南の島で新たな戦闘

ソロモン諸島は、第二次大戦で最悪の戦闘があった場所として有名になり、日本軍と米軍のガダルカナル島の戦いは、多くの映画や本に記録されてきた。終戦以来、世界の注目は離れていたが、同諸島は最近、新たな戦闘の舞台になった。今度の戦いは内部から起きた。国連は6月、多数派のガダルカナル人と少数派のマライタ人の民族対立の仲裁に乗り出した。しかし武力衝突で死者が出たほか、2万人が避難した。■

## フィンランド

### 移動するロマ

ヨーロッパ大陸でロマ（ジプシー）が移動しているのはコソボだけではない。フィンランドは、1999年1000人以上のスロバキア出身ロマが政治的庇護を求めたのを受け、スロバキア国民に対する査証なし入国許可を一時停止した。ロマたちは、スロバキア政府の迫害を逃れてきたというが、フィンランドのジュリグ首相は、欧州連合（EU）参加を視野に入れて取り締まり強化を約束した。フィンランドは、カナダ、英国、ベルギー、ドイツと並んで、ここ数年ロマの最終目的地のひとつ。■

# 庇護を求めて

## スイス

庇護希望者に厳しいルール

スイスでは、庇護希望者の増加に対し有権者の懸念が高まり、1999年6月、規則が強化された。新たな措置によれば、コソボ出身のアルバニア系住民のようなグループは、一時的な集団入国を認められるものの、個人に対する迫害の認定（難民として永続的な庇護を受けるための必須条件）は制限される。

適切な身分証明書を持たない人が、通常の難民申請をするには、証明書がない正当な理由を示さなければならない。スイスは今年、6万人（国民一人あたりの数ではヨーロッパ最大）が庇護申請を行なうとみられている。

## 米国

難民オンライン

米国赤十字は、世界の難民と避難民を追跡する新しいオンライン・システムを作る計画を発表した。赤十字は、コソボ危機の際、米国にきたコソボ難民のデータベースを構築。この「避難民リンクシステム」を、コンピュータ・ソフトウェアのオラクル社と協力して、難民や避難民が利用できる世界的なシステムに拡大する計画だ。

## ソマリア

あらたな飢饉

ソマリア南部は、干ばつと「アフリカの角」地域の終わりのない戦闘のため、新たな大飢饉の恐れに直面している。国際援助職員によると100万人が危機に瀕しており、彼らを援助するため1750万ドルのアピールがなされた。1992年の飢饉では、同地域で約30万人の死者が出ている。

COPYRIGHT



## スポーツを通じて

世界のスポーツ団体と人道機関が、コソボ危機の際、数十万人のコソボ難民に少しでも安らぎを与え、気分転換をさせるために協力した。

以前にもアフリカで UNHCR と共同事業をした国際バレーボール連盟は、アルバニアとマケドニアのキャンプにボールとネットを寄付。地元の指導者に財政的支援もした。国際サッカー連盟 (FIFA) と欧州サッカー連盟 (UEFA) 也、UNHCR と国連児童基金 (UNICEF) に協力。難民キャンプと地域の学校の子ども数万人に、サッカーボールなどの用具を送った。

「スポーツを通して難民たちは元気を取りもどし、前向きに生きていけるようになるのです」と、レオノラ・ルット (21歳) は語る。彼女自身、アルバニアに逃れる前に頭と腕を負傷し、親友の死を自分の腕の中で看取った経験をもつ。現在は UNHCR のフィールド職員として働いている。

この企画は、当初は難民を対象にしていたが、関係団体は、コソボにも活動を拡大し、住民たちがふつうの生活を取り戻すのを支援していきたいと語っている。■

## やっと自由に

イラン人のカリム・ナサル・ミラン (54歳) は、11年間フランスのシャルル・ド・ゴール空港の赤いベンチで寝起きしてきた。

食事は近くのピザ屋かファストフード店。パーテンドーや空港勤務医の世話を受けながら、毎日ラジオを聴いたり、日記を書いて過ごしてきた。

しかし1999年7月初め、とうとうベルギーから難民認定が下りて、つらい生活にも終止符が打たれることになった。彼は1970年代にイラン王政に反対して身分証明書なしで国外追放され、80年代に難民認定書を交付された。ところが認定書の入ったカバンを盗まれたため、行き場

を失った。書類がないから強制退去にもされず、入国も許されず、空港に軟禁状態になってしまったのだ。最近、盗まれた書類が見つかり、ベルギー政府が受け入れを許可。「軟禁」中に通信教育をはじめたから、ブリュッセルで修了させたいね ミランはそう語っている。■



「ベッド」で手紙を書くミラン (ドゴール空港で)

## 良きサマリア人

アフリカ統一機構 (OAU) は、OAU 難民条約の調印30周年に合わせて、アフリカ難民と避難民のために優れたはたらきをした国に贈る賞を創設した。第1回目の受

賞国はタンザニアとコートジボアールに決まった。この賞は、長期にわたり多数の難民を受け入れてきた国、難民を生まなかった国、難民問題に政府高官レ

ベルで取り組んできた国などに授与されることになっている。■



## 新しい副高等弁務官、着任

UNHCR の新しい副高等弁務官が任命された。フレデリック・バートン米国際開発局 (AID) 移行企画室長だ。前任者のジェラルド・ワルツァーが40年間にわたる UNHCR 勤務を終えて、5月に退任した後を引き継いだ。バートンは、ルワンダの人権監視プログラム、アンゴラの地雷プロジェクト、インドネシア民族融和と暴力防止、ユーゴ紛争の報道推進計画を指揮してきた。民間では、12年にわたり様々な方面で戦略計画や組織的開発、マーケティングに携わった経験をもつ。■



© TRIBUNE MEDIA SERVICES, INC. ALL RIGHTS RESERVED. REPRINTED WITH PERMISSION

## 「コソボは、一個の石からつくりなおし、 建てなおさねばならない。」

国連コソボ暫定統治機構(UNMIK)のクシュネル  
国連事務総長特別代表

「彼らは、何もかも燃やし尽くしました。」

マザーテレサ協会のシスター  
(セルビア軍のコソボ撤退について)

「セルビア系住民には自宅にとどまるようお願いします。もう難民は沢山だ。これ以上は困る。」

NATO軍即応部隊のジャクソン司令官(コソボのセルビア系住民に残留を訴えて)

「私たちは軍事線のないヨーロッパを建設しなければならない。分けへだてのない、民主的で史上初の平和なヨーロッパを。」

クリントン米大統領(ヨーロッパを訪問して)

「コソボ地方は、いまや史上最大の犯罪現場のひとつだ。」

米連邦捜査局(FBI)のルイス・フィーチ局長(FBIはコソボでの戦争犯罪を調査している)

「米国の小型爆弾は、丸い銀色のおもちゃのようだったが、イギリス製のはオレンジ色に塗ったジュースの缶みたいだった。」

ある地雷専門家(子どもたちに地雷だけでなく、不発弾の危険も警告して)

「ミロシェビッチの政策のおかげで、もうクライナ地方(クロアチア)にも、スラボニアにも、ボスニア西部にもセルビア勢力はいない。そしてセルビアには60万人の難民がやってきた。」

コソボ在住のセルビア人作家でアルテミジ(過去数年のユーゴの政策を非難して)

「地雷の脅威は、これから3~5年間はコソボ住民にとって日常的な出来事になるでしょう。」

米国の地雷専門家ドナルド・スタインバーグ(コソボにおける

地雷撤去の難しさを語って)

「コソボには携帯電話もカウンセリングもある。われわれが求めているのは、トウモロコシだけなのに。」

アンゴラで活動する国連職員(国際社会の援助方法にイラだちを示して)

「これは、国連が1940年代後半に平和維持という概念を考案して以来、最大の挑戦になるだろう。」

コソボでのセルジオ・ピエラデメロ事務総長特別代表

「過去10年間に、私たちは4回戦車で戦いに行き、4回トラクターで帰ってきた。」

ユーゴスラビアのジンジッチ民主党党首(セルビア部隊が何度

